

同誌第二十九卷第五号所載の山脇巖の手紙には十月に今和次郎がベルリンを訪れたことが、また第六号所載の和田季雄の手紙には十月八日、ベニスでゴンドラに乗って行く途中、向うから来たゴンドラに今が乗っていたことが記されている。

④ ローマの日本美術展覧会と松岡映丘の渡欧

昭和五年四月二十六日から約一カ月間、イタリア政府主催の日本美術展覧会が開催された。この展覧会はイタリア政府の熱心な要請によって開催されたもので、名誉総裁にムッソリーニが就任し、日本側は大倉喜七郎男爵が財政的援助を行ない、現代日本画百七十八点が展示され、横山大観、平福百穂、松岡映丘、速水御舟、長谷川路可、大智勝観が美術使節としてローマに赴いた。

大観（夫人同伴）、御舟、勝観ら院展の画家は一月三十日に約五百名の盛大な見送りを受けて東京駅を出発した。寺内、中村ら表具師も同行したが、これは会場のヴィーヤ・ナチョナーレ展覧会場の壁面二百五十坪を貼り、床の間十三を作り、純日本風の展示空間を作るためであった。百穂、映丘、路可ら帝展の画家は約一カ月遅れて二月二十五日、やはり千人を過す盛大な見送りを受けて出発した。この展覧会には大観の「夜桜」「瀟湘八景」「富士」、映丘の「屋島の義経」、百穂の「荒磯」、竹内栖鳳の「睡郷」その他力作が出品され、会場は日本風にしつらえられ、特に大観は日本趣味を押し出そうという意気込みで夫人とともに和服で通すなどしたので、大いに関心を集めた。大観夫妻と勝観は六月二十八日に、映丘と路可は九月六日に、御舟は十月二十三日に、百穂は欧州視察を了えた岡田

三郎助とともに十一月二十五日に帰国した。映丘帰国の模様を九月七日付『時事新報』は次のように伝えている。

歐米美術行脚の映丘畫伯歸朝す

紐育美術館で見つけた見事な平治合戦繪卷

六日午後四時横濱入港の郵船大洋丸で去る四月伊太利羅馬に開催の日本美術展に出席し、其後歐米各美術館に陳列の東洋美術の行脚視察を續けて居た帝國美術院會員東京美術學校教授松岡映丘畫伯は、安内役の長谷川路可畫伯と共に歸朝した、横濱埠頭には川合玉堂、結城素明、鏑木清方、矢澤弦月、吉田秋光諸氏を始め、美術家が出迎へて賑つた、松岡畫伯は伊太利コマンダー トーレー コロナール イタリア（伊太利王冠章）長谷川畫伯は伊太利のジョットの壁畫、マドリツドのゴヤの壁畫の摸寫を土産に持ち歸つた、映丘畫伯は語る

『私は日本美術展の開會式に參列後直に歐洲各地の美術行脚に出掛けた、支那の繪畫は到る所に立派なコレクションがあつたが日本の繪畫となると數は少く注目すべき物もほとんどなかつた豫期せずして非常に嘆賞に堪えなかつたのは紐育美術館にあつた平治合戦繪卷の見事な出來榮のものであつた、之は住吉慶恩筆と傳へられて居るものである、歐米人の日本畫に對する興味は非常なものであつたが果して深く理解して居るか何うかとなると疑問と云つてよい、日本畫家の立場から向ふの名畫を澤山見て來た釋だが結局信念を深め得たのは、吾々としては寧ろ今後も東洋精神の傳統の深さを追究して行くことが第一であるといふことであつた

た、上陸したら畫題を得て帝展への出品が出来るだらう』〔下略〕

なお、映丘の海外旅行券請求案（昭和職員関係書類^{庶務掛}）によれば、視察国はイタリヤ、フランス、ドイツ、スペイン、イギリス、アメリカ合衆国であった。

⑤ 矢代幸雄の欧米出張

昭和五年十月十一日、教授（帝国美術院附属美術研究所主任）矢代幸雄は文部省より欧州各国出張を命ぜられた。出張上申案（昭和職員関係書類^{庶務掛}）には次のように記されている。

案

教官ヲ外國ニ出張セシムル件上申

官氏名 東京美術學校教授 矢代幸雄

出張地 歐洲各國

獨逸國、奧太利國、匈牙利國、希臘國、伊太利國

出張期間 昭和五年十一月初旬出發シ昭和六年末帰還ノ豫定ニテ

約九ヶ月間ノ見込

出張ノ目的

矢代教授ハ本校西洋美術史授業ノ擔任者ニシテ多年其研鑽ニ從事シ既ニ大正十年ヨリ同十三年ニ至ル間文部省在外研究員トシテ歐洲ニ滞在シ又昭和二年ヨリ翌三年ニ涉リ約一ヶ月間歐米各國ニ出張ヲ命ゼラレタルコトアリ 此ノ如ク一再歐洲ノ地ニ足迹ヲ印シ能ク其風土ニ通曉セル者ナリ 今回重ネテ歐洲へ出張

ヲ要スルハ従来ノ研究ニ漏タル處ヲ補足研究スル為ニ歐洲ヲ巡歴シ今古ノ美術品又ハ史蹟ヲ觀覽踏査シ并ニ歐洲最近美術界ノ趨向変遷等ヲ考察セシメントスルニ在リ 且又明年一月ヨリ五月ニ涉リ獨逸國柏林府及デウ（デュッセルドルフ）、セルドルフ市匈牙利國ブタペスト市ニ於テ開催セラル、日本美術展覽會ノ状況ヲ視察セシメ此等展覽會ニ依リテ日本美術ガ幾許ノ影響ヲ歐洲人ニ與ヘ隨テ其美術界ノ將來ニ如何ノ刺戟ト變化ヲ惹起スベキモノナルヤ等ニ就テモ考覈セシメタキナリ

旅費 本校校館費ノ内ヨリ支給ス

右記載ノ如キ事情ナルニ付矢代幸雄ニ歐洲各國へ出張ヲ命ズル御発令相成度上申候也

年 月 日

学校長

文部大臣宛

矢代は十一月九日東京を出發。シベリヤ經由で欧州に向かった。

右上申案に記されているベルリンその他の日本美術展覽会とは当時日本美術（主に現代日本画）を広く海外に紹介しようという文化政策を背景として実施されたもので、昭和四年初夏のパリ、同五年春のローマにおける日本美術展覽会に引き続いて開催された。矢代にやや遅れて同月十八日にはベルリン展の委員として小室翠雲と広島晃甫も欧州へ向かった。開会式は翌六年一月十七日に行われ、矢代は「現代日本美術」と題して講演した。ベルリン、次いでデュッセルドルフ、そしてブダペストにおける展覽会が終了したのは同年五月二十日で、矢代は同月十一日に帰国した。